

資 料

パ リ
—— 誕生から現代まで ——
[XXVIII]

P.クールティヨン 著
金 柿 宏 典* 訳注

第 3 共和政 (3)

ティエールからフェリックス・フォール¹⁾へ

内心では敵意を抱いていた議会がいよいよながら多数決で承認して発足した第 3 共和政は、1940 年まで 69 年間存続する事により、異常な生命力を証明する。

その開幕は困難以上のものである。敗戦、パリ包囲、内乱であった。恐るべき消極性により掠奪され分断されたパリの破片を再び縫合するためには、アドルフ・ティエールの巧妙な手腕が絶対に必要だった。首都は破壊された家々や広場や黒焦げになった記念建造物から復活する。

「さあ仕事を再開しよう、
希望と信頼を取り戻そう！
さあ仕事を再開しよう
パリは何時も偉大になるさ！」

これは 1872 年の唄のリフレンだった。到る所で、人々は修繕し、再び木を植え、悲痛な痕跡を消し去るため再建に務めた。

* 福岡大学名誉教授

ティエールは赤字を補填し、ドイツへ支払う賠償金を償還するための予算を要請した。しかし、彼は共和政に加担した議会の多数派を占める王党派によって追放されてしまう。正統王朝主義者たちがまさに王政復古を手中にしようとした時、シャンボール伯爵²⁾の頑固な非妥性が、王政復帰を妨害してしまったのである。彼は三色旗を国旗として承認する事に絶対反対の態度を変えず、シャルル 10 世の白旗を如何なる代価を払っても再び掲げる事を欲していた。とはいえ、議会はマク・マオンに投票し、共和政の統治を彼に托した。マジヤンタ公爵³⁾の支配の下で、サンティエ街⁴⁾の大商人たちは彼を擁護したが、社会主義者の労働者たちはガンベッタに自分たちの支持を示した。穏健なオルレアニストたちの協力を得て、彼は名士たちに支配されている「公爵たちの共和国、共和派無き共和国」を非難した。がっしりした目鼻だちの顔を大きなマスクでかくし、雄牛のような首筋をふくらまし、次第に頭を烈しく動かしながら、彼は自分の人生を生き抜いた。彼は民衆にお辞儀をしてから身を起し、敵を軽蔑するため両腕を組み、時には理性に、時には情熱に、さらに反乱にさえ訴えたのである。彼は正に雄弁家だった。マク・マオンについて彼は言った。「奴は降服するか辞職すべきだ」。王党派の没落を惹起するカオールの雄弁家が投票を実現させた 1875 年の憲法の後の数年後に、マク・マオンは政界から姿を消す。しかしながら、戦闘的ガンベッタよりも、穏健派の共和主義者たちはジュール・グレヴィー⁵⁾を共和国の大統領に選んだのである。

「聖職者中心主義、これこそ敵なのだ」とガンベッタは叫び、この主張はジュール・フェリー⁶⁾に支持されたが、しかし彼に追いこされてしまう。フェリーはフランスの植民地帝国を大いに発展させたにしろ、過激な世俗主義（諸制度の管理・運営を聖職者から一般人の手に移そうとする考えや運動）を噴出させてしまう。3月30日の法令の結果としてセーヴル街の修道院からイエズス会士が追放されるが、その第二の門はこじ開けなければならなかった。「神も支配者も無用」とはブランキのモットーだったが、1881年のペール・ラシェーズ墓地での埋葬はガンベッタに反対するデモの機会となった。数年後、『ユダヤ人のフランス』*la France juive*の著者ドリュモン⁷⁾と共に猛威をふるることになる反ユダヤ主義となる。サディ・カルノー⁸⁾が共和国大統領を辞任したグレヴィーの後任になったのは、議会でフェリーが暗殺されかかった時である。

当時はまた陸軍大臣であるジョルジュ・ブーランジェ⁹⁾という將軍の甘いマスクに夢中になった人々の間に過激なナショナリズムの躍動が目撃された。彼はブロンドの口髭をはやし、黒馬に乗り、盲目的愛国心を説いたのである。「リベンジ將軍」と呼ばれた彼は

パリを恍惚とさせた。彼の好きな花、赤いカーネーションはあらゆるコルサーージュにつけられる。パリの民衆に対して、「兵士の軍帽を再び掲げた」人物を、人々はネクタイやマフラーやお皿にまで飾ったのである。それは熱狂だった。將軍は首都の寵児になる。公金横領罪で告発され、流刑にきまったその同じ年に、彼はセーヌ県から代議士に選出される。これは王党派の最後の真剣な攻撃となる。この攻撃もオルレアン公爵の逮捕とブーランジェの自殺で終る。彼は、椿姫と同じ肺病で死んだ愛人ド・ボヌマン夫人のイクセルにある彼女の墓の前で自決したのである。

それは無政府主義者たちの時代だった。ラヴェコル¹⁰⁾は『気楽な親翁』*la Père pinard* (「兵士不用！武器不用！」) を出版し、ロボ兵宮¹¹⁾で爆弾を爆発させた(レストラン・ヴェリで逮捕される)。ヴァイヤン¹²⁾はブルボン宮の半円形の議場に向かってロケットを発射する。エミール・アンリはサン・ラザール駅のカフェ・テルミヌス¹³⁾に爆弾を仕掛ける。ポーヴェルはマドレーヌ寺院への攻撃の時に自爆する。イタリア人のカセリノ¹⁴⁾はリヨンでカルノー大統領を暗殺する。議会では労働者出身の議員が「コミュニヌ萬歳！」と叫ぶ。反乱の風が吹き始める。ジョーレス¹⁵⁾は統一社会主義を唱える。

この間、1894年12月22日、シェルシュ・ミディ街¹⁶⁾にあった軍事法廷は、叛逆罪でドレフュス大尉¹⁷⁾に対し軍籍剥奪と牢獄要塞への監禁の判決を下していた。その頃パリではこの囚人の潔白について賛否両論が激突していたが、囚人はサリュ島¹⁸⁾へ移送されてしまった。政府はこの訴訟の再審請求を受け入れる。囚人の兄は部隊長のエステルアジ伯爵¹⁹⁾の偽証を告発する。ゾラは『私は告発する』*J'accuse*の中でドレフュスを弁護した。法務大臣は辞任しなければならない。エステルアジは軍事法廷に出頭させられる。家庭の中で賛否が対立する。共和国大統領フェリックス・フォールが君主たちの訪問を迎える前に、ロシア皇帝に会いに行った時、フランスはロシアに対する親愛感で一体になった。しかし、パリ市民の呼ぶ「事件」はすぐさま話題の中心になる。家族の集いで、街頭で、文学者協会で、いたる所で、人々は議論し興奮した。法廷と重罪裁判所は筆舌に尽し難い闘争の目撃者になる。両陣営は容赦なく戦う寸前だった。ブルボン宮で、議場はボクシングのリングそのものになってしまった。守衛たちが敵同士の戦いを包みこむ埃の煙の中に突入し、争いを止めようとしたが無駄だった。女たちの激しい喧嘩のおこるオペラ座のバレエのダンサーたちしながらに、議員たちは殴り合った。遂に最高裁判所の決定により、ドレフュスはレンヌの軍事法廷に出頭を命じられる。論争は果し無く続行した。パリでは再審の経過を伝える新聞を人々は奪い合った。ルベール²⁰⁾がシュタインハイル夫人²¹⁾

の腕の中で死亡したフェリックス・フォールに代わる。新大統領は、ドレフュス支持の意見の人物だったので、オートゥーユの競馬場でステッキで殴られてしまう。反ドレフュス派、ドレフュス擁護派が互いに攻撃し合う。「事件」は政治問題になる。アルフレッド・ドレフュスを告発した主要メンバーの一人であるアンリ大佐²²⁾は、逮捕され、独房で頸動脈を剃刀で切って自殺する。少数派になった内閣はヴァルデク・ルソー²³⁾内閣に交替する。デルレード²⁴⁾やジュール・ゲランの様な過激なナショナリストや反ドレフュス派の領袖が逮捕される。彼らは数人の友人たちと共にシャプロル街²⁵⁾の印刷所「反ユダヤ派」*l'Antijuif*をバリケードで防備し、文字通りの要塞に改造していたため、40日ほどの籠城の後にやっと降服したほどだった。その翌日の1899年9月21日、ドレフュス大尉は釈放されたのである。

しかし、既に人々は来るべき万国博覧会²⁶⁾を話題にしており、そのために、メトロポリタンと呼ばれる地下鉄建設の計画が作成され、建築家、技師、労働者の国際的な団体が設立され、彼らがセヌ河畔に国際的友好関係のシンボルたる博覧会を実現したのである。

美化工事

この間にも、人々は大いに働いた。オペラ座大通り²⁷⁾が開通し、ガルニエ作の記念建造物オペラ座が、1874年、多くの上級社会の人々やスペイン国王の参列の下に開館する。ナポレオン3世の宮廷の肖像画家であった彫刻家カルポー²⁸⁾が製作した大理石の群像「舞踏」*la Danse*は入口に飾られていたが、この作品はスキャンダルの種になる。金で縁取られた真紅のカーテンのホールで「ウィリアム・テル²⁹⁾」序曲、「ユダヤ女」*la juive*が演奏され、正統な家柄の貴族たち、成金の貴族たち、芸術や優雅な仕事で成功した人たちの前でバレエが上演された。コレージュ・ド・フランスが拡大され、ソルボンヌが再建され、サン・ジェルマン大通り³⁰⁾に面している医学校が拡張された。ルイ・ル・グラン校³¹⁾が再建され、チュイルリ宮の廃墟が撤去され、フロール館とマルサン館が修復される。モンマルトルの丘は家々が覆われる。到る所で大通りが建設され、開通し、延長される。モーベール広場³²⁾周辺の不潔な小路は浄化される。セヌ県知事プベル氏³³⁾は家庭からでる芥をいれる箱を設置し、屑屋の仕事の大部分を禁止したのである。

印象主義

1872年に荒いタッチのモネ³⁴⁾の画が、—— 最初は軽蔑的に —— 印象主義の名で呼ばれて以来、美術的出来事が「光の都」パリをして全世界の画家にとり活動の中心たらしめた。この美学はパリにやって来たヨンゲキント³⁵⁾、ルアーヴル出身のブーダン³⁶⁾やエドワール・マネ³⁷⁾らによって準備された。若い流派は光溢れる野外の、はかないものの、軽快な筆触の、情感の流派である。自然は支配するのをやめ、ここでは芸術家の独自の気質や情熱や気分の召使になっている。これらの新しい画家たちはパリの主題そのものの中に、音楽家たちが夢の速さを持って逃げ去る瞬間や季節や時間のヴァリエーションに与えているのと同じような多くのヴァリエーションに没頭するのに必要なものを発見している。パリは野外の大きなアトリエとなり、この探究者の一団の靈感の泉となったが、彼らはしばしば飢えており、パリ全市民と呼ばれていた盲目的な民衆からは軽蔑されていた。民衆たちはその当時メソニエ³⁸⁾、ブグロー³⁹⁾、ボナ⁴⁰⁾、ジャン・ポール・ローランス⁴¹⁾などのアカデミーの画家たちや、カパネル⁴²⁾、ロワベ、ロッシュグロス、ジェローム⁴³⁾などの旧弊な画家たちを称賛していたのである。明るさと太陽と、新鮮で時には繊細に時には強烈な色彩の昼食情景の中に、ルノワール⁴⁴⁾は陽気で辻馬車と散策の朝のマラケ河岸を描いている。ムーラン・ド・ラ・ガレットのようなダンス場で、画家は画学生や女工たちの姿を見事に描き出しているが、彼は彼らをモンマルトルの自分のアトリエでポーズさせて描いたのである。ピサロ⁴⁵⁾は、緑、青、黄、薄紫で、昼と夜のすべての時間のアムステルダム街⁴⁶⁾、イタリオン大通り⁴⁷⁾、モンマルトル大通り⁴⁸⁾、クリシー大通り⁴⁹⁾を我々に示してくれるが、丁度それは彼がルーヴルのホテルで借りた部屋から描いたオペラ座大通りと同じであった。雨の日のボン・ヌフ、歩道に通行人の影、7月14日パリ祭の旗飾り、これらもモネである。

エッフェル塔

首都のすべての小公園、広場、散歩道に、「駄作」と呼ばれた名士たちの胸像や立像、おびえて不恰好な姿をしたひ弱なヴィーナス像の大量生産品を散蒔いた時期に、1889年の万国博覧会がギュスターヴ・エッフェル⁵⁰⁾の新造の塔の影の下で開会したのである。鉄の建築家の傑作として、このブルゴーニュ出身の技師の建造物は、まさに一つの一大事

件であった。巧緻に鋳でとめられた繊細で見事な骨組みは、コタンサンと機械組立工たちの仕事に王冠を授与している。

しかし、あらゆる真の新奇さにみられるように、この作品の実現は猛烈な反対を惹起した。完成の2年前、この塔は多くの芸術家や作家たちの抗議的であった。「工場の汚い巨大な煙突の如くパリを見下す滑稽極まりない塔」の計画に対し、その実現を阻止すべくあらゆる人が非難したのである。ユイスマンス⁵¹⁾自身、可成り大胆だったが、この工業文化の勝利の中に、「古道具屋の店のノートル・ダムの尖塔、鐘の無い尖塔だが、大砲が備えてあり、信者たちを財政のミサ、手数料の晩禱に招待し、火薬の爆発と共に、資本の典礼の祝祭を告げる事」を看取している。

しかしながら、「パリの貴夫人」は建設され、立派に立っている。それ以来この都市の旗印としてモンマルトルの丘にドームを聳えさせているサクレ・クール大寺院と呼応している。塔は論争の種になる伯母さんとして立ち続けている。スーラはエッフェル塔を魅力的な画の中に点描画手法で実現するが、それ以前に塔はミニアチュアや鋳造物やプリントや文鎮として全世界の机上に運ばれ、パリの小さな幻影を表示していたのである。

(続く)

パ　　リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XXVIII)

1) Félix Faure (1841-1899) : ルアーヴルの富裕な皮革商で、1881年にセヌー-アンフェリユール県から穏健な共和派の代議士として選出される。多くの関係ポストを歴任するが、特に第2次フェリー内閣の時の植民地相としての功績は大きかった(1883-85)。下院副議長(1893)、海相(1894-95)を経て、共和派と社会主義者に対抗するため王党派と共和主義者の穏健派の協力により、1895年1月17日、共和国第6代大統領に選出された(1895-99)。任期中にロシアとの同盟を強化に努力、露帝ニコライ2世のパリ訪問(1896)の答礼として、フォールも1897年8月にクロンシュタットを視察している。マダガスカルの領有に成功したが、ナイル川上流地域の覇権争いでイギリスに譲歩せざるを得なかったファショダ事件(1898年11月3日、フランス隊撤収)では国粋主義者のみならず一般庶民からもその弱腰を非難された。ドレフェス事件では最初再審に反対していた。彼は1899年2月19日にエリゼ宮で心臓発作のために急逝する。この時、彼はメグの愛称で親しんでいた画家スタネルの妻マルグリット(1869-1954)と大統領執務室で密会していたという艶聞を流されている。

2) Henri Charles Ferdinand Marie Dieudonné d'Artois, duc de Bordeaux, comte de Chambord (1820-1883) : シャルル10世の孫で、ペリー公爵を父とし、ブルボン王朝最後の王位継承者。最初ボルドー公爵と称したが、王党派により贈与されたシャンボール城に囚んで、シャンボール伯爵を名乗った。1830年の7月革命により亡命し、ブラーハで養育され、シャルル10世の歿後、正統王朝主義者たちは彼をアンリ5世と呼んだ。1838年にウィーン近郊のフロースドルフに移住しモデナ公女テレサと結婚(1846)したが、結局二人の間に男子が生れず、伯爵の死と共にブルボン王朝は消滅してしまう。第2帝政崩壊後の国民議会では正統王党派とオルレアン派が多数を占め、オルレアン派のパリ伯(1838-94)が両派の合同を企図、1873年8月5日、フロースドルフにシャンボール伯を訪問し、王政復古について話し合った。しかし彼がフランス国旗として3色旗を否認し飽く迄ブルボン家の白旗を主張したために会談は決裂し、王政復古の夢は消えたのである。頑強に主張を固執したシャンボール伯を、シャルル・モーラスは、「国王以上に王権を主張した司祭にして教皇」と呼んだ。

3) duc de Magenta : マジャンタはロンバルディア地方のミラノ西方の町で、1859年6月4日、カンロベールとマク・マオンの指揮するフランス・サヴォワ連合軍がオーストリー軍に勝利し、ミラノ占領を実現した。この軍功により、マク・マオンはこの地名を冠した公爵に叙せられた。

4) rue du Sentier : 第2区にあり、レオミュール街とポワソニエール大通りを結ぶ長さ330米、最少幅10米の通り。この通りは、1849年にクレリ通りやジュヌール通りなどの通りを合併して出来上った。1652年にはシャンティエ通り rue du Chantier とも呼ばれたが、これはこの小道 sentier が仕事場 chantier に通じていたからだといわれる。しかし本来の意味は、1612年から13年にかけての厳冬の日、飢えた狼たちが餌をあさりにこの小道を通ってきたためだといわれる。この通りの22番地から24番地にある館は、ルイ15世の愛妾ポンパドゥール夫人の夫ル・ノルマン・デティオールが、1745年に彼女との離婚判決後に住んだ所である。国王は彼を遠ざけようとして、コンスタンチノーブル駐在のトルコ大使に任命したのだが、エティオールは愛人のオペラ座の踊り子レーヌ嬢がパリを離れるのを嫌がったため、大使の任命を拒絶したのである。同じ23番地に、ポンパドゥール夫人になる前のジャンヌ・ポワソンが夫のル・ノルマンと新婚時代に住んだ館が現存している。

5) François Judith Paul, 通称 Jules Grévy (1807-1891) : ジュラ県のモン・スーヴォードレの農家の出身。弁護士となり、1848年の立憲議会の議員に当選、穏健な共和派として、ルイ・ナポレオンが大統領になる普通選挙の危険な結果を予言した。第2帝政時代は政界から引退(1852年以後)、パリ弁護士会長などを務めていたが、帝政崩壊後に政界に復帰(1868)、立法議会の議員から共和派の重鎮として国民議会議長(1871-73)、次に下院議長(1876-79)となり、マク・マオンに代って第3共和国第3代大統領に選出された(1879.1.30)。8年間の在任中、地味だが現実的な政治を、特に外交面で実行し、共和政確立のために着実な業績を残した。国力回復を可能にする平和維持に専心し、ヨーロッパ各国の大使館業務を強化したが、この事はプロシヤに復讐せんとする国粋主義者たち、特にブーランジュ派を怒らせた。1885年に再選されたが、大統領の権威を隠れ蓑にして売勲行為をしていた女婿のダニエル・ウイルソンの不正に巻きこまれてしまう。大統領職を確保しようと努力するが、議会の圧力により退陣を余儀無くされ(1887.12.1)、郷里に引退し失意の内に歿した(1891.9.9)。

6) Jules François Camille Ferry (1832-1893) : ヴォージュ県サン・ディエ出身で、

自由な気風のブルジョワの家庭に生れ、自由思想家の父の影響で、少年時代から信仰心を持たなかった。1855年にパリで弁護士を開業したが、弁論はパッとしなかったが、「タン」紙 *Le Temps* などに発表した論説で注目され、1869年に共和派の代議士として選出され、第2帝政時代、野党の領袖として政府攻撃の先頭に立ち、特にセーヌ県知事オスマンのパリ改造工事を批判した（「オスマンの空想的予算」1867）（「パリ」のXXVの注38を参照されたし）。ナポレオン3世のスタンでの降伏（1870.9.2.）後、パリに成立した第3共和政府により、フェリーはセーヌ県知事、ついでパリ市長に任命（1870.11.17.）され、極左派の騒乱を鎮圧し、パリ籠城中の市民たちに対する食糧配給の任に当たった。しかし十分な食糧を支給する事が出来ず、「飢餓のフェリー」Ferry-le-Famineの綽名をつけられている。ヴォージュ県選出の代議士として国民議会では共和派に参加し、マク・マオンの統治に反対した。冷静沈着であらゆるデマゴジーを軽蔑していた彼は、社会的にみれば保守派である。裕福だった彼は兄弟の支持もありまた結婚によってさら富裕になった。2度にわたる文部大臣の在任中（1879.2.-1881.10., 1882.1.-8.）、イエズス会などが経営する非公認教会学校の解散、初等義務教育制度の確立などを推進した。この根本的改革に反対した総理大臣フレシネ（1828-1923）は辞任に追い込まれ（1880.9.19.）、その後任の首相にフェリーが就任したのである。ドイツに対する復讐しか念頭にないクレマンソーらの極左勢力の反対を恐れず、フェリーが植民地獲得に努力を傾注したのは、フランスの国力と国際的評価をたかめ、しかも隣国ドイツになんの不安感を与えないためであった。2度にわたる派兵（1881.5., 1881.8.-11.）によりチュニジアを支配下に置き、第2次フェリー内閣（第3共和政で最長の1883年2月から1885年3月まで）の時に、フランス領コンゴの獲得（1883-85）、マダガスカルの領有（1883）、インドシナ占領が実行された。しかしインドシナ征服は多大の困難を伴い、議会に対し遠征軍の派遣について十分な説明をしていなかったため、クレマンソーらの猛烈な攻撃に曝されて、内閣は306票対149票で不信任され辞職した（1885.3.30.）。インドシナの植民地化成功にも不拘、フェリーは死ぬまで与論の執拗な憎悪に悩せられる。1887年の大統領選挙に立候補した時、精神異常者からブルボン宮でピストルによる狙撃を受けた（1887.12.10.）。1889年の選挙で落選。1891年にヴォージュ県の上院議員となり、93年2月には上院議長となった。死ぬ3年前の事であった。

7) Edouard-Adolphe Drumont (1844-1917) : フランスのジャーナリスト。セーヌ県庁に奉職するが、ジャーナリズムの世界に関心を持ち、「劇場新聞」*La Presse théâtrale*,

「世界」紙 *Le Monde* などに論説を発表した。ヴィヨ (1813-83) の紹介で「フィガロ」紙に入社、すぐに「自由」紙 *La Liberté* にかわった。彼の初期の作品は博識に裏打ちされ好評だった。『私の古きパリ』 *Mon vieux Paris* (1878) などである。彼はまた小説なども書いている (*Le Dernier des Trémalin* : 1879)。第3共和政発足初期の頃に盛んだった反宗教的風潮に感化されていた彼は可成りの論説を書き溜めており、それを『ユダヤ人のフランス』と題して出版した。この反ユダヤ主義の本は大きな反響を呼び、10篇余りの反論が寄せられた。彼はこれらの反論に再反駁した。彼は、反教権主義はユダヤ的フリーメソンの影響の中に、完全ではないが最高度に重要な説明を発見するだろう、と主張した。熱心なカトリック信者のジャーナリストのポール・ラセル (1828-1900) に感化され、ドリュモンはカトリック信者になり、教会の社会的教義の解説などを発表。「自由な言葉」紙 *La Libre Parole* を発行、社会問題について活気溢れる評論を掲載した。

8) Marie François Sadi, 通称 Sadi Carnot (1837-1894) : 父は大革命時代の有名な軍事技術家のラザール・カルノー (1753-1823) である。エコール・ポリテクニクを卒業して土木技師となり、次にセーヌ・アンフェリエール県知事に就任、ついで政界に入り、1871年に国民議会議員、1876年から80年まで下院議員として左派共和派に属した。その後は公共事業相 (1880-82)、歳相 (1885-86) を歴任し、婿の売敷事件に巻き込まれて辞任したジュール・グレヴィエの後任として第3共和政第4代大統領に選出された (1887.12.3.)。827票対616票の勝利だった。彼の在任中、ブーランジェ事件、パナマ運河事件など政治的経済的大事件が共和政の根幹を揺るがしたが、彼はこれらの難事件を見事に收拾した。国民的人気の高かったカルノー大統領はリヨンで開催された博覧会に出席するため、この絹織物の都市を訪問した。彼は市民が自由に自分の馬車に近付けるように、身辺警固を中止させた。群衆の中にまぎれこんでいたイタリア人の無政府主義者サント・カセリノが、馬車のステップに駆け登り、短刀をカルノーの胸に深々と突き刺したのである。大統領は即死した (1894.6.24.)。怒った市民たちは市内のイタリア人経営の商店を破壊したが、この掠奪は3日間も続いたという。

9) Georges Ernest Jean Marie Boulanger (1837-1891) : レンヌ出身の軍人、政治家。イタリアのカピリヤ、インドシナの戦線で活躍、立身出世欲に燃えた野心家の彼は急進的左派の政治家や王党派のオマール公とも親交を結び、この人脈からクレマンソーの推挙によりフレシネ内閣の陸相に就任した (1886-87)。共和主義者の彼は、軍上層の王党派の将校たちを押え、軍内部の改革に着手、兵役期間の5年から3年への短縮、下士官

や兵士の待遇改善、植民地軍の創設、新式銃ルベルの採用などを実施し、好評を博した。しかし彼を国民の人気者にしたのは、シュネブレ事件に当って彼が漸行した対プロシヤ最後通告である。この事件はパニ・シュル・モーゼルの国境警備に当たっていたフランス人警官ギョーム・シュネブレが、マルヌ・シュル・モーゼルに住むドイツ人の友人に招かれ国境警備業務の相談のためドイツ国内に入った時、スパイ容疑で逮捕された事件である(1887. 4. 20.)。すぐに單なる過失による椿事と判断し、彼は4月30日に釈放されるのだが、その10日間の間に、この事件をフランスに対する侮辱としてプロシヤに復讐すべし、と主張する極右勢力のキャンペーンが一般国民の賛同を得てしまう。この解決に武力行使も辞さないとするブーランジェは愛国的英雄として、一躍、注目の的になった。平和裡に解決したい政府は外交交渉による決着を希望し、プロシヤのビスマルクもかかる些末な事件でフランス国民の憎悪が増幅する危険を避けるため、シュネブレの釈放に応じたのである。このビスマルクの処置が愛国的フランス人にとっては屈服と映じ、ブーランジェはビスマルクをへこました人物、普仏戦争の敗北の恥辱を濯いだ「復讐將軍」となって、国民的英雄と賛美された。

ブーランジェの対独強硬策と彼の過熱した大衆の人気が共和派政府を不安にし、シュネブレ事件の1か月に成立したルーヴィエ内閣は彼を陸相からはずし(1887. 5.), クレルモン・フェラン駐在の第13軍団司令官に左遷した。この処置に怒ったブーランジェ支持派は、彼の赴任を阻止すべく彼の出発日の7月8日のリヨン駅頭に集結し、警備に当たった150名の警官隊と衝突したのである。ガンベッタや右翼のリーダーのデルレードらは、「彼は必ず戻ってくる、我々が必要としているのだから」と叫んだ。

売勲事件によるグレヴィー大統領の辞任などに集約される政府への不平不満は、急進的左派、労働者階級、王政復古を狙う王党派、帝政復を期待するボナパルティストなどに拡大し、彼らがブーランジェを中核とした「現状打破の一種の同盟」が発生したのである。危険を感じた政府はブーランジェを退役させる(1888. 3.)。しかし軍籍をはなれた彼は彼らを糾合した国民党党首として政界に進出、各県で予備選挙を繰り返して、国民投票さながらの運動を展開、パリの補欠選挙では対立候補に8万票もの大差をつける24万票を得て大勝した(1889. 1. 27.)。熱烈な支持者たちはエリゼ宮に乗り込み、政権を奪取すべきだ、とブーランジェを説得したが、彼は、秋の下院選挙による合法的政権の樹立をめざす、としてこれを拒否した。しかし彼の決断は愛人ボスマン夫人の哀願によるものという。

ブーランジェのこの決断が彼の運命を定めてしまう。政府はブーランジェ式選挙方法を

阻止するために投票を郡単位方式に改正、ブーランジェの支持の母体である愛国者同盟を解散させ、内相コンスタンは巧妙に逮捕をちらつかせてブーランジェを脅迫、遂に彼はブリュッセルに亡命（1889.4.1.）、指導者を失ったブーランジェ派の熱気はたちまち消滅し、この年の9月から10月にかけて実施された下院選挙で、ブーランジェ派は40議席にも達しなかった。また陰でブーランジェ派に資金を提供していた王党派も少数派になり、共和派政府は基盤を確立したのである。しかし一旦は後退した右派はパナマ事件やドレフィス事件で再び勢力を盛り返す。

ベルギーに亡命したブーランジェは完全に過去の人となり、亡命してから2年後の1891年9月30日、2か月前の7月16日に死亡した愛人のマルグリット・ド・ボスマンの墓の前でピストル自殺を遂げた。ブリュッセル郊外の町イクセルの墓地で、午前11時30分の事である。

10) François Claudius, 通称 Richard, 又は Léon Léyer Ravachol (1859-1892) : フランスの無政府主義者。オランダ人とドイツ人の混血の父から、1862年に認知された。染色工として働いていたが、無政府主義者となり、多くのテロをパリを中心に実行した。最初のテロは、1892年3月11日、サン・ジェルマン大通り136番地の建物のエレベーターの中で爆弾を仕掛け爆発させたが、被害は出なかった。この家には1891年に無政府主義者たちに死刑の判決を下した控訴院判事ブノワが住んでいたため、彼に対する復讐からだった。3月27日にはクリシー街の家を狙ったが、このアパートに前記の裁判の時の検事代理ビュロが住んでいたためである。

彼が逮捕されたのは、この数日後の1892年3月30日である。場所は、第9区から第10区にまたがるマジヤンタ大通り24番地のレストラン・ヴェリである。彼に給仕をしたボーイのレロなる人物が彼を識別し警察に通知したためだった。無政府主義者たちはラヴェコルの復讐をするため、彼が重罪裁判所に出頭する前日の1892年4月25日にこのレストランに2発の爆弾を仕掛け、午前10時頃に爆発させた。この爆発により、死者2名、負傷者3名の犠牲者がでた。生立ちの環境から情状酌量されてパリで懲役刑を宣告されたが、ソムムの重罪裁判所が彼の他の大罪（2名の殺人）を告発し、身柄をモンブリゾンに移送、そこで死刑の判決を下し、1892年7月11日、彼は断頭台で処刑された。

11) ロボ兵營 caserne Lobau : 第4区にある市役所河岸とリヴォリ街を結ぶ長さ180米、幅40米のロボ通りの2番地にあった。1861年にジャンヴィエにより建造され、地下道で隣接するナポレオン兵營と市役所に通じていた。1885年にセヌ県庁の付属施設と

なった。

12) Auguste Vaillant (1861-1894) : フランスの無政府主義者。1893年12月9日土曜日、下院の議場に爆弾を投げこみ、40余名に軽傷を負わせた。迅速な捜査により警察は20名ほどの容疑者を拘留し、犯人のヴァイヤンを特定した。彼は議員たちを傷つける事が目的で殺害するつもりはなかったから、爆弾には弾丸を詰めず釘しかいれなかったと主張した。有名な弁護士ラヴォリの弁護も空しく、死刑の判決が下され、断頭台で処刑された(1894.2.4.)。

13) サン・ラザール駅は1885年から89年にかけて拡張され、アムステル街とローマ街の間のサン・ラザール街に平行して長い正面玄関が建設され、両端に広い広場を配した現在の姿が出現する。この広場の間に終着駅ホテル「ホテル・テルミニユス」L'Hôtel Terminus が建設される。1894年2月12日、このホテルで爆弾事件が発生、約20名の負傷者を出す惨事となった。犯人はエコル・ポリテクニクの学生で19歳の無政府主義者エミール・アンリである。彼は同年5月21日にギロチンで処刑されるが、検死報告によると、恐怖のあまり、ギロチンの刃が落ちる前に死亡していたそうである。このアンリ青年の犯行は、ラヴァコルのテロ(1892)やヴァイヤンの犯行(1893)に続くパリで起きた主要なテロだった。1894年6月24日、リヨンでカルノー大統領を暗殺した犯人カセリノも自分の犯行は前年に処刑されたエミール・アンリの復讐である、と告白している。

14) Santo Hieronimus Caserino (1873-1894) : ロンバルディア地方のモタ・ヴィスコンティ生れ。パン屋の小僧時代の17歳の頃から無政府主義者となり、リヨンの博覧会出席のために訪れたカルノー大統領を短刀で刺殺した(1894.6.24.)。前年にパリで処刑された無政府主義者にエミール・アンリの復讐のためである。死刑の判決を受け、1894年8月6日に処刑されるが、法廷でも処刑に当たっても堂々たる勇気ある態度を示したといわれる。

15) Jean Léon Jaurès (1859-1914) : フランス南部のタルヌ県カストルの出身で、ブルジョワ階級に属していた家系から2人の提督を出している。エコル・ノルマルに首席で入学(1878)、卒業後はアルビの高校(1881-83)、次にトゥールーズ大学の哲学教授となった(1883-85)。タルヌ県選出の代議士となり(1885)、中央左派に属したが、1889年の選挙で落選し、その後暫く博士論文の執筆にあたった。カント、フィフティテ、ヘーゲルらドイツの哲学者の思想の中に社会主義の源泉を探究している。カルモアの鉱山労働者のストライキを支援(1892)、1893年1月の地方選挙で帰郷、社会主義者としての旗

職を鮮明にした。下院の社会主義政党的指導者として、その統一に努力する。マルキシズムに共鳴したが、プロレタリアート独裁には反対、社会主義の根本は個人の自由かつ完全な発展にある、と主張したが、これは彼流の人権宣言の実現に他ならなかった。彼は民主主義を守りつつ平和的手段で階級なき平等な社会を設立できると信じていた。彼はこの理想を「トゥールーズ通信」誌 *le Dépêche de Toulouse*、「小共和国」誌 *La Petite République*、「ユマニテ」誌 *L'Humanité* に発表することになる。ドレフュス事件ではゾラと共にドレフュス擁護の論陣を張り、不幸なユダヤ人軍人の無罪判決を実現した。1899年のヴァルデック・ルソー内閣に社会党左派の指導者アレクサンドル・ミルラン（1859－1943）の入閣をめぐって、同じ社会党左派のジュール・ゲド（1845－1922）やエドワール・ヴァイヤン（1840－1915）らと対立した。彼らが反対したのは、この内閣にパリ・コミューヌを鎮圧したガリフェ將軍がいる事で、弾圧の張本人と社会主義者は席を同じくすべきではない、という主張である。ジョーレスが彼らと和解し統一社会党の結成を実現したのは1904年夏のアムステルダムでの第2回インターナショナル大会である。ブルジョワ政府との協力を拒否するというゲド派の主張に譲歩した形になったが、実質的には労働組合などの絶大な支持を持っていたジョーレスが主導権を確保していたのである。かくして1905年4月26日、統一社会党が誕生した。労働者階級の生活改善と福祉の充実、ジョーレスをして、政府の帝国主義的膨張政策である植民地獲得のための侵略や、隣国ドイツに対する敵視による軍備拡張政策に対して、痛烈な批判の鋒先を向けさせた。彼は独仏の和解を主張し、両国の関係が平和である事が最善であると訴えた。ジョーレスのかかる言動はナショナリストの文化人たち、たとえばシャルル・モーラスやペギーなどにも反感を抱かせた。1914年7月31日、午後9時頃、クロワッサン街とモンマルトル街の角にあるビヤホール「ル・クロワッサン」で友人と食事中に、背後から熱狂的な愛国主義者ラウール・ヴィランによりピストルで射殺された。彼の暗殺は暴力の勝利を象徴しており、これが直ちに第一次世界大戦という大殺戮の序幕となるのである。政府はジョーレスが暗殺された翌日の8月1日に総動員令を發布し、開戦に踏みきった。ジョーレスは1924年にパンテオンに安置される。後日談になるが、暗殺犯ヴィランは、1919年3月に釈放され、スペインに亡命するが、スペイン内戦（1936－39）の間に共和主義者により殺害されたという。

16) rue du Cherche-Midi : 第6区から第7区にまたがり、クロワ・ルージュ十字路とヴォーヅラール街を結ぶ長さ1,212米、幅13米から15米の通り。昔はリュテシアとヴォー

ジラルを結ぶローマ人の造成した路だった。いろいろな名で呼ばれていたが、パリ南部に行くドラゴン街の角にあった Hôtel de Chasse から、「Chasse から Midi (南) へ行く」Chasse au Midi が縮約されて、この名になったといわれる。この通りの 37 番地にある屋敷を、1696 年にカルメル会修道士たちが購入し、彼らはこの建物を、1756 年にルイ 14 世とモンテスパン夫人の子供のトゥールーズ伯爵の未亡人ソフィー・ド・ノアイユに貸した。このため、それ以後この建物はトゥールーズ館と呼ばれるようになった。彼女の死後、借り主は何人も変り、大革命により修道士たちが追放された後の 1800 年に、それまで市役所にあった 2 つの軍事法廷がこの建物に移転して来たのである。余談になるが、ユゴーの妻となるアデル・フーシェの父がこの軍事法廷の書記官をしており、この建物に住んでいたため、1822 年 10 月 12 日に結婚したユゴーとアデルの新婚夫婦は、1824 年 3 月までこの建物に住んでいた。

17) Alfred Dreyfus (1859-1935) : アルザス出身のユダヤ人将校。砲兵大尉として陸軍省参謀本部第 2 局に勤務中、パリ駐在ドイツ大使館武官シュワルツコペン少佐に軍事機密を売却したというスパイ行為で逮捕された (1894.10.15.)。軍事法廷は、1894 年 12 月 22 日、終身流刑の判決を下し、大尉は軍籍を剥奪され、ギアナの悪魔島へ移送された。最初のうちは、大尉の有罪を疑う者は一人もおらず、ジョーレスでさえ、法廷の判決を寛大すぎると歎いたほどである。しかし終始一貫して無罪を主張していたドレフュスの親族たちは、彼の再審を実現するため、政治家やジャーナリストに援助を求めた。やがて、ドレフュス大尉と同じ参謀本部情報局長ピカール中佐が、問題のドイツ大使館駐在武官とハンガリー出身の参謀将校エステルアジ少佐との間に交された書簡を発見、其の筆蹟がドレフュス大尉を有罪とした証拠の手紙と同一であると確認した。ピカールはこの新資料を軍上層部に報告し、ドレフュス大尉の再審を要請したが、無視されてしまう。陸軍首脳はドレフュス事件は解決済みの態度を堅持した。かかる失態の公表は軍の権威を失墜させると考えたからである。軍事法廷に召喚されたエステルアジは釈放されてしまう (1898. 1. 11.)。この時、判事たちは民衆の歓呼の声で迎えられ、人々は「ユダヤ人くたばれ!」「エステルアジ萬歳!」と叫んだのである。

このような反ユダヤ感情が沸騰していた時、ドレフュスの名誉と人権を擁護するため、敢然と立ち上ったのが作家エミール・ゾラである。彼はクレマンソーが編集している「オロール」紙 *L'Aurore* に共和国大統領フェリックス・フォール宛に「私は告発する」*J'accuse* と題する激烈な一文を寄せ、参謀本部と軍事法廷の不正、ひいては体面を保つ

のに汲汲としている陸軍を弾劾した（1894.1.14.）。ゾラの主張に共鳴し、ドレフュス大尉の無罪釈放を要求する文化人も声をあげる。アナトール・フランス、シャルル・ペギー、ジャン・ジョーレス、マルセル・プルースト、アンドレ・ジッドらである。しかしゾラは告発文により罰金3,000フラン、禁固1年の判決を下されたのである。

ドレフュス支持派には以上のような知識人の他に共和派、社会主義者らが結集したが、反ドレフュス派は軍部、カトリック教会、右翼団体が参加し、これから約10年間、フランスの国論は2分され、敵対することとなる。しかし、ドレフュス大尉を有罪にした文書が、事実と異なる贋文書である事が判明、政府も再審を実施せざるを得なくなった。文書を改竄して偽証したアンリ大佐は留置されたが、留置場の独房で自殺する（1898.8.31.）。彼は遺言で自分は国家の利益を守るための愛国心から実行した、と述べている。しかし、レンヌでの軍事法廷もドレフュスを再び有罪とし、禁固10年の判決を下したのである（1899.9.9.）。この判決に対し、急進派や左派を中心勢力として同年6月22日に成立したヴァルデック・ルソー内閣は、判決の10日後、ただちにドレフュスに対して特赦を行い、事件の決着をはかったのである（9.19.）。こうして世論は鎮静化していったが、ドレフュスが正式に無罪となり軍役に復帰するまで7年の歳月が必要だった。1906年7月12日、高等裁判所はレンヌの軍事法廷の判決を取り消し、ドレフュスに無罪の判決を下す。ドレフュスは軍に戻り、第一次世界大戦に参加、中佐となって退役している。

ドレフュス大尉の無罪により、ドレフュス派は完全に勝利し、その核となった共和派連合は1902年の選挙に圧勝、軍部やカトリック勢力、右翼団体を押え、第3共和国を再び共和主義、社会主義の左派的路線に引き戻す事に成功したのである。

18) 正確にはサリュ群島の3つの島、Royale, Saint-Joseph, Diableのうちの最後にあげた「悪魔」Diable島である。サリュ群島は、フランスの海外県のギアナ県に属している。ギアナ県は南米大陸の東北部の大西洋の沿岸地方で、フランス、オランダ、イギリスが覇権を争ったが、最終的にフランスの領有が承認された（1667）。フランス人たちは大革命によって奴隷制が廃止されるまで、多数の黒人奴隷を使用して大農場を経営していた（1794-1805）。大革命時代から国事犯の流刑地として利用され、1852年に設置された徒刑囚の監獄は1945年に廃止されるが、陰惨な評判をこの地に与えている。ドレフュスはギアナの沖合に浮かぶ悪魔島の懲治監に收容された。

19) Marie Charles Ferdinand Walsin Esth rhazi (1847-1923)：ハンガリーの名家エステルアジ家の血をひくと自称していた。陸軍参謀本部に所属していた時、情報局長

ピカール中佐により、ドレフュス大尉を有罪とした明細書を偽造した犯人として告発された。彼は軍事法廷に出頭を命じられたが、法廷は彼を無罪として釈放する(1898.1.11.)。民衆はこの判決に狂喜したが、前述の如く、ゾラの弾劾文発表の契機となった。ドレフュス事件の再審が開始され、少なくとも部分的には彼の犯行が裏付けられたが、文書の受取り人だったパリ駐在ドイツ武官シュワルツコヘンの『手記』*Carnet*が出版され、より明確に彼の有罪が確認されたのである。その後彼は軍から追放される。彼はイギリスに逃亡した(1899)後に証拠の捏造を告白している。

20) Emile Loubet (1838-1929)：フランス南東部ドローーム県マルサンヌ出身。弁護士からモンテリマル市長となり(1870-99)、次に穏健派の共和主義者として下院議員に当選(1876-84)、上院議員(1885-87)を経て公共事業相(1887-88)に就任、1892年に首相に選出されるが、これも温厚で争いを好まずプチ・ブル的良識を持っていた彼の人物が議員の多数に好印象を与えていたからだという。瀕死した無政主義者のテロを收拾し、パナマ事件のスキャンダルを解決して首相を辞任(1892.11.)、上院議長となるが(1896-99)。フォール大統領の急死(1899.2.18.)後、第3共和国第7代大統領に就任した(1899-1906)。彼はドレフュス事件に当っては再審に賛成するドレフュス支持派だったため、ナショナリストたちから猛烈な非難を浴び、1899年6月4日、オートゥーニュ競馬場で愛国主義者のクリスチャン男爵からステッキで殴打されている。共和政防衛の内閣としてワルデク・ルソーに組閣を命じ、彼は再審で再び有罪となったドレフュスを特赦して、国論を二分していたドレフュス事件を解決に導いた。次のコンブ内閣に対しては教会勢力を教育界から排除して公教育制度確立を支援、ロシアとイギリスを歴訪し、仏露同盟を成立させ、またファシヨダ事件以来敵対関係にあったイギリスと和解するなどの外交的手腕を發揮した。大統領の任期満了と共に政界を引退した。左右対立の激化した時期を乗り切り、右派勢力を抑え、第3共和国の基礎を安定させた事こそ彼の最大の功績であった。

21) Marguerite, 通称 Meg Steinheil (1869-1954)：スイスと接する東部のテリトワール・ド・ベルフォール県の県都ベルフォール近郊のボークール生れの恋多き女性。中流階級の出身で、1890年に凡庸な画家アドルフ・シュタインハイルと結婚したが、夫は彼女より22歳も年上だった。1897年、フォール大統領の愛人となり、逢瀬を重ねたが、大統領はこの逢引の最中に急死した(1899.1.16.)。彼女はその後も奔放な生活を送るが、1903年5月31日、ロンサン小路の自宅アパートのベッドの上で縛られているのが発見さ

れ、夫と母親が死体で転がっていた。殺人と親殺しで告発されたが、1909年11月、彼女は釈放された。イギリスに渡った彼女は、1917年にイギリスの貴族と再婚し、安穏な最後を迎えた。

22) Hubert Joseph Henry (1846-1898)：フランス北東部マルヌ県ポニー出身の軍人。チュニジア(1882)、トンキン(1887)で軍務に服した後、陸軍情報局に入り、1894年に大佐に昇進し、対敵防諜班長に就任した。ドレフュス大尉の再審で、有罪の証拠の脆弱さから1894年の判決が却下されるのを恐れ、有罪を確定させるための偽の証拠を捏造した。それは前にドレフュスを有罪にしたドイツ武官シュワルツコヘンに宛た彼の同僚のイタリア人将校パニザルディの手紙を、彼が贋作したのである。この手紙の中にドレフュスの名が銘記されていた。この手紙はドレフュス有罪の決め手として利用され、ゾラの裁判の時に公開されたが(1898.2.23.)、やがてこの文書が捏造された事が調査の結果判明し、アンリ大佐は8月30日、パリ郊外のモン・ヴァレリアン要塞監獄に収容された。その翌朝の31日、大佐の自殺体が監房内で発見される。偽文書作成は飽くまで憂国の至情から出たものだ、と彼は遺言していた。反ユダヤ主義の新聞*La Libre Parole*は、自殺した大佐の未亡人のため募金を呼びかけるキャンペーンを展開した。

23) Pierre Marie René Waldeck-Rousseau (1846-1904)：ナント市の大富豪の家に生まれた。父も第2共和国時代の代議士であった。弁護士を開業し(1873)、冷徹で意欲的な弁論で鳴らし、1870年にナント市長から代議士に当選(1879)し共和派連合に属した。ガンベッタ内閣、フェリー内閣の内相(1881.10.-82.1., 1882.2.-1883.3.)を歴任し、職工組合法を成立させ(1884)、パナマ運河事件ではギュスターヴ・エッフェルの弁護に当たった(1893)。1894年からロワール県選出の上院議員、次に上院議長となり、ドレフュス支持派の指導者の一人になった。左派連合の支持を得て首相になり内閣を組織したが、この内閣は、1899年6月22日から1902年6月3日まで在任し、第3共和国時代でも最も多くの功績をあげた。再審で有罪になったドレフュスを特赦し、長い間国内の対立の原因を除去、政教分離の原則を確立するための準備として結社法を制定(1901)し、イエズス会などの宗教団体の経営する学校に対する認可権を国家が持つことを宣言し、次のコンブ内閣が実現する政教分離法の成立を容易にした。このような初等中等教育の大改革はこの内閣の功績である。対外的には拳匪の乱(1900)の時には在留邦人の生命財産と国家の権益を守護するため、中国に遠征軍を派遣している。病に侵されて彼は、1902年5月の立法議会選挙前に辞任、後継首相のコンブ(1835-1927)の認証式には重病をおし

て上院に出席した。

24) Paul Déroulède (1846–1914) : パリ生れの作家、政治家。劇作家エミール・オージェの甥。1869年、フランス座で一幕の韻文劇『ジャン・ストレネル』*Jean Strenner* を上演し演劇界にデビューした。しかし愛国心に燃える青年だった彼は志願兵として普仏戦争に参加、捕虜になるが脱走に成功、ロワール地方やフランス東部で抗戦した。敗戦後に韻文劇『兵士の歌』*Les Chants du soldat* (1872) を発表、愛国心と復讐の詩人として注目される。1882年に愛国者同盟を結成、団長としてブーランジェ將軍を応援、右翼のリーダーとなった。1889年に代議士となり、89年に再選されるが、フォール大統領の葬儀の翌日、軍を煽動し共和政打倒のクー・デタを企図した(1899.2.23.)。叛乱罪により懲役10年の判決を下されたが、1905年に恩赦を受けた。多くの作品があるが、いずれも愛国心の涵養とドイツに対する復讐を主張したものである。1914年1月30日、南仏のニースで死去した。

25) rue de Chabrol : 第10区にあり、マジヤンタ大通りとラ・ファイエット街を結ぶ長さ420米、幅20米の通り。この通りは、フォーブル・サン・ドニ街とフォーブル・ボワソニエール街を結ぶため、シャルパンティエ伯爵の土地に1822年に造成された。その名は、1812年からセーヌ県知事を務めていたジルベール・ガスパール・ド・シャブロール・ド・ヴォルヴィック(1773–1843)からとられた。この通りの51番地の家に反ユダヤ主義者ジュール・ゲランが住んでいた。彼は友人の協力により屋内にバリケードを構築したため、逮捕しに来た警官隊を家に入れず、人呼んで「シャブロール砦」となったこの家に1899年8月13日から9月20日まで籠城した。怪我人を出さずに逮捕しようとした警官隊は、この家のガスと水道を止め、乗合馬車や馬車の通行を禁止した。その訳は、これらの乗物に乗ったゲランの支持者たちが、シャブロール砦の前を通りかかるや、砦の中に救援の食糧品を投げ込んだからである。

26) Exposition universelle : 最初の万国博覧会は、1851年にロンドンで開催されたが、フランスでは1855年、1867年、1878年、1889年、1900年、1937年とパリを会場として開催されている。その度毎に記念建造物を残しているが、有名なものは、1889年のエッフェル塔、1900年のアレクサンドル3世橋とグラン・パレとプチ・パレ、1937年度のシャイヨー宮などであろう。各国が出展した建物は、各国の王侯や大富豪などに、博覧会終了後に譲渡されている。

会の目的は自国の産業の発展を展示して、国威の発揚と経済の増進を狙ったものである

が、各国の展示品や出演者による文化交流と見物人の蟻集による観光収入も重要な効果となった。特に1900年の博覧会は産業博覧会そのものであり、地下鉄の開通（ヴァンセンヌ・ヌイイ線が7月19日に開通）と相俟って、パリの近代化に大きく貢献し、沈滞していたフランス経済を好転させた。1900年5月4日、ルベール大統領の臨席を得て開会した博覧会は、12月12日に閉会する7か月の間に5,000万人もの入場者が押し寄せ、大成功であった。フランスの植民地になった地方の住居を再現し、現地人を出演させる帝国主義的展示もあったが、全国の36,000余の自治体の首長を招待し、2万人を越す首長を一堂に会した大宴会が開催され、政府の勢威を誇示したのである。

27) avenue de l'Opéra : 第1区と第2区に跨り、アナトール・フランス広場とオペラ座広場を結ぶ長さ698米、幅30米の道。1864年に着工、順次延長され、1876年に完成した。この工事は、古くエチエンヌ・マルセルの頃から廃土や塵埃捨て場として使用されているうちに、小山になってしまったサン・ロッシュ丘 butte Saint-Roche を削り取る工事から開始された。この場所はまた15世紀頃から処刑場として使用され、贖金作り、贖札作り、邪宗徒、強盗などの重罪人が、火刑になったり、釜茹でに処せられていた。またこの高さを利用し、1429年9月8日、パリのサン・トノレ城門を奪取しようとしたジャンヌ・ダルクの援護地点になった。またこの丘の上には風車があり、この丘の土がシャン・ド・マルスの土地を平坦にするために完全に撤去され、オペラ座大通りが開通するまでで続いていたという。現在からでは想像もできない風景です。

28) Jean-Baptiste Carpeaux (1827-1875) : フランスの彫刻家、画家。父は石工。1844年に美術アカデミーに入学、リュードに学び、1854年ローマ大賞を得てイタリアに留学、ミケランジェロに強い感動を覚えた。1861年に帰国し、ナポレオン3世の知遇を得て、王族や重臣たちの肖像を彫刻した。1866年ルーヴル宮のフロール館の装飾の注文を受け、名作「花の女神フロラの勝利」を製作した。その他の代表作にオペラ座正面の装飾彫刻「舞踏」（1869、ルーヴル美術館蔵）などがある。ロダンが登場するまでの最大の彫刻家で、特に群像の製作に力量を発揮した。

29) 「ウィリアム・テル」 *Guillaume Tell* は、パリで歿したイタリア人作曲家ロッシーニ (1792-1868) の最後のオペラ (1829)。彼はこれ以後39年間再びオペラを作曲しなかった。この作品は発表当時から人気があり、現在でもその人気は持続している。

30) boulevard Saint-Germain : 第5区、第6区、第7区にのびるセーヌ左岸の東西に走る幹線道路で、トゥールネル河岸からアナトール・フランス河岸を結ぶ長さ3,150米、

最少幅 30 米の道路。1855 年に着工、1866 年に完成した。この開通により、多くの由緒ある通りが消滅した。

この大通りで、観光客のみならずパリ市民に人気のある店はビヤホールやカフェである。151 番にあるブラスリ・リップは、アルザス出身のリップマンにより 1870 年の普仏戦争後に創業され、1920 年以降は文化人の蝟集する店として有名になる。170 番地のカフェ・デ・ドゥー・マゴは 1813 年にビシュ街で開店し、1873 年に現在地に移転してきた。店名は店の右手の柱に飾られている支那人の人形 magot に由来する。172 番のカフェ・ド・フロールは第 2 帝政末期頃の開店で、店の前に置かれた小さな花の女神フローラの像にその名が由来する。右翼のリーダーのシャルル・モーラスが常連で、機関誌「アクション・フランセーズ」*L'Action Française* 創刊号の論文を執筆したという。詩人アポリネールらが毎週土曜に集って詩の改革を論じたのもこの店で、特に第 2 次世界大戦後はサルトルら実在主義者の集まる店として有名になった。

31) Lycée Louis-le-Grand : 第 5 区のサン・ジャック街 123 番地にある。この学校の起源は古く、フィリップ 5 世 (1293-1322) の秘書官で大法官だったジョフロ・デュ・プレシ・バリソンが 1317 年頃この土地に所有していた家と果樹園を 40 名の学生のために寄贈したことに始まる。Collège du Plessis といったこの学校は、リシュリュエ枢機卿が、この土地にソルボンヌの教会を建設するため取り壊し、収容していた学生は Collège de Calvi に転校した。やがてソルボンヌに譲渡され Collège du Plessis-Sorbonne となる。大革命時代は牢獄として使用され、主として貴族の奥方を拘留した。1811 年からは神学部が設置され、次に理学部、文学部が置かれたが、1821 年にソルボンヌに併合される。

ジョフロ・ド・プレシはマルムーティエ修道院の司祭でもあったので、1328 年に上記の家の隣りの家を修道院の学生達に与え、Collège de Marmoutier とした。1637 年の修道院改革後に不用となったこの建物はイエズス会に売却される。イエズス会はこれを拡充し Collège de Clermont と名付けた。イエズス会がこの学校を増改築できたのは、1560 年 10 月 23 日に死去したクレモン司教ギョーム・デュブラの遺贈金のお蔭である。寄進者の名を取ったこの学校はソルボンヌ大学から完全に独立しており、1582 年にこの学校の礼拝堂建設の礎石はアンリ 3 世が据えている。

アンリ 4 世の暗殺を企てたジャン・シャテル (1575-1594) がイエズス会のこの学校の生徒だったため、学校は 1595 年に一時閉校となるが、1618 年に授業を再開、隣接して

いる Collège de Marmoutier を買収して拡大していく。この学校の名声に関心を持ったルイ 14 世が視察に訪れ、イエズス会は国王の訪問に感謝するため、校名を Collège Louis-le-Grand と改名した (1674)。

イエズス会修道士の教育界の追放により閉校されるが (1762)、翌 73 年にはスタッフを一新して再開され、時勢の変遷に関連して何度も改称されるが、1849 年、最終的に旧称に戻った。その長い歴史の中から、多くの有名人が輩出している。例えば、モリエール、ヴォルテール、ロベスピエール、ドラクロワ、ヴィクトール・ユゴーなどが挙げられよう。

32) place Maubert : 第 5 区のラグランジュ街、フレデリック・ソートン街、メートルアルベル街、サン・ジェルマン大通りが合する辻の広場。交通の要衝となっている三角形のこの広場の起源は古く、1215 年頃には存在し、1348 年には近くにあった礼拝堂の名に因んでサン・ティヴ Saint-Yves 広場と呼ばれていた。モーベル広場の名の起源は、1161 年のサント・ジュヌヴィエーヴ修道院の第 2 代院長ジャン・オーベール Jean Aubert の転化という。この広場は 12 世紀から 13 世紀半ばまでは教育の中心地であり、16 世紀初頭から 18 世紀半ばまでは絞首刑を執行する刑場、19 世紀初頭は乞食たちの集合地で、柄の悪い居酒屋や淫売屋が立ち並んでいた。刑場の時代には邪教徒や重罪人たちが火刑にされており、ユマニストのエチエンヌ・ドレ (1509-1546) もこの広場で火刑に処せられている (1546. 8. 3.)。現代では日曜市が立ち、明るい活気のある清潔な商業広場になっている。

33) Eugène René Poubelle (1831-1907) : ドーバー海峡に臨むフランス北西部カルヴァドス県の県都カーンの出身。1883 年から 96 年までセーヌ県知事を務めた。任期中、彼はパリの衛生面の改善に努力、家庭から出る芥類を必ず市の用意した塵箱に入れて出すように命令した。この塵箱は彼の名をとり「プベル」poubelle と呼ばれた。塵箱は、毎朝、塵収集車が、ラッパを吹きながら巡回して空にしていった。

34) Claude Monet (1840-1926) : パリ生れだが、両親が家業のためル・アーヴルに移転したので、少年時代をこの港町で過した。14 歳から既に画才を発揮し、その地の名士の戯画を描いて報酬を得ていた。ル・アーヴルでウジェーヌ・ブーダン (1824-1898) を知り、彼の指導でセーヌ河口や海辺の風景を描いた。市の奨学金を得てパリ旅行をし (1859-60)、サロンに出品されていたコロールソーの作品に触れた。両親の希望したパリの美術学校に入学せず、スイスの美術学校に入り、そこでピサロやセザンヌを知った。アルジェリアで兵役をすませた後、ル・アーヴルに帰り (1862)、ブーダンと創作を再開、

オランダ人の画家ヨンゲキント (1819-1891) を知った。パリに上京してグレール (1805-1874) の画塾に入門、ルノワール、シスレー、バジルらと友人になる。1863年夏のフォンテーヌブローの森での生活から、有名を「草の上の食事」*Le Déjeuner sur l'herbe* を描き始めた。経済的困窮のため、彼は何度もノルマンディーの両親の元に避難するが、その間にも創作を続け、サロンに出品するが、何回も落選の憂き目を体験する。かかる苦境が妻のカミーユの死を速めたといわれる。彼女はモネのモデルだった。普仏戦争中は兵役を逃れロンドンに亡命、そこでターナーの作品に感動する。1872年に帰国した彼は第1回印象派展覧会を開催する。この展覧会に彼は1862年ル・アーヴル滞在中に創作した作品に「印象、日の出」*Impression, soleil levant* という題名をつけた。これを批評家ルイ・ルロワが皮肉って、この新流派の名としたのである。

彼の作品はほとんどが風景画で、自然の陽光の変化を見事に捕捉している。物に固有の色彩は無く、光の変化によって色彩も変化する、という印象派の理論をモネは主張し実践した。彼のこの理論の集大成の作品はクレマンソーの注文により製作した大作「睡蓮」*Nymphéas* である。この作品は国家の買上げる所となり、チュイルリのオランジュリ美術館に展示されている。

35) Johan Barthold Jongkind (1819-1891) : オランダの画家で印象派の先駆者の一人。表現派としてカラーとモネの中間的存在。セーヌ河口のノルマンディー地方の風景を主として描いた。カラー、ブーダン、モネらと親しく交際したが、晩年は迫害妄想の狂気にとりつかれ、精神病院で狂死した。

36) Eugène Louis Boudin (1824-1898) : オンフルール生れの画家。最初は水夫、次に本屋の店員などをしてしたが、ミレー (1814-1875) の指導で絵画の道に進む。モネ、カラー、ヨンゲキントらと交際、主に船や海岸を描き、印象派の最も優れた先駆者の一人。

37) Edouard Monet (1832-1883) : 印象派の創始者で近代絵画の父。パリの富裕な判事や外交官を出した家に生れ、画家志望を反対され、商船学校に入学、船員としてラ・ガダループ号に乗船し、リオ・デ・ジャネイロに行った。1849年に帰国、クテール (1815-1879) の画塾に入門したが古風で折衷的画風に満足せず退学、ルーヴル美術館の名画を模写し、やがて、イタリア、ベルギー、ドイツ、オランダなどを旅行、ベラスケス、ゴヤ、16世紀のヴェネチア派の作品に感銘した。帰国後は、カラーやクールベの作品から、写実の真髄を看取した。1859年にサロンに応募した「アプサンを飲む人」*Buveur d'absinthe* は、ドラクロワの推薦があったにもかかわらず落選してしまう。以後何度も

落選した事に憤激した彼は、同様に官展のサロンから拒否された友人たちにも呼びかけ、自分たちの落選した作品展「落選作品展」を開催し、旧弊な保守的アカデミーの支配する画壇に反撃した。この展覧会は一大センセーションを惹起し、批評家たちからの総反撃と彼らの主張を盲信している一般市民からの非難が集中した。しかし彼の周囲には、彼の自由明快な色彩と構図による斬新な美に理解を示す若き芸術家たち、モネ、ルノワール、ピサロ、セザンヌらが集まり、かくして印象派が誕生する。またボードレールやゾラなどの文学者も彼の作品の啓示する新しい美に理解を示し称揚するようになった。しかしマネの画業が本当に理解されるまでには、何回もの落選と非難中傷が続くのである。彼の死後一年目の1884年、パリ美術学校で彼の作品の回顧展が開催されて始めて、マネの近代画における功績が正当に評価されるのである。

38) Jean Louis Meissonier (1815-1891) : 官学派の代表的画家の一人。歴史画、特に戦争画を細密なタッチで描いた。ナポレオン3世のイタリア遠征に同行(1859)、「ソルフェリノの戦い」*Bataille de Solferino*、「胸甲騎兵の突撃」*La Charge des cuirassiers*などが代表作。

39) Adolphe Wiliam Bouguereau (1825-1905) : 19世紀のアカデミズムの画壇を代表する最も有名な画家。パリ美術学校でピコ(1786-1868)に学び、ローマ大賞を得てイタリアに留学、帰国は画家として成功し、幸福な一生だった。歴史画、肖像画を描いたが、画風は折衷的である。パリのサント・クロチルド教会、サン・トーギュスタン教会のフレスコ画も創作している。代表作は「ヴィーナスの誕生」*Naissance de Vénus*。

40) Léon Joseph Florentin Bonnat (1833-1922) : 第3共和国時代の最も有名な肖像画家で、ティエール、ユゴー、シャヴァンヌ、テース、パストゥール、グレヴィー、ルナンらの著名人物を描き、名声を博した。マドリッドでマドラソ(1815-1894)に学び、1857年のサロンに出品した肖像画で注目された。美術品蒐集家としても有名で、蒐集した作品を故郷のバイヨンヌに寄贈、彼の名を冠した美術館が創設された。

41) Jean Paul Laurens (1838-1921) : 歴史画の大家で、好んで中世に画題を求めた。「カルカソヌの異教徒の解放」*Délivrance des émmurés de Carcassonne*、「敬虔王ロベールの破門」*Excommunication de Robert le Pieux*などの他に、パンテオンの壁画「聖ジュヌヴィエヴの死」*La Mort de Sainte Geneviève*がある。日本人画家中林不折、鹿子木孟郎が彼に学んでいる。

42) Alexandre Cabanel (1823-1889) : パリ美術学校教授の彼はアカデミズムの代表

者で、第2帝政時代の画壇の重鎮として名声に包まれ、公的機関から多くの注文を受けている。パンテオンの装飾用の歴史画の大作「サン・ルイの生涯」*La Vie de Saint-Louis* が代表作。肖像画や女性のヌード画も描いている。

43) Jean Léon Gérôme (1824-1904)：歴史画の人気画家ドラロシュ (1797-1856) に学び、イタリアに留学 (1844-45)、帰国後の1847年のサロンに出品した「鬪鶏をずるギリシャ青年たち」*Jeunes Grecs faisant battre des coqs* で認められた。繊細で古典的なネオ・クラシックの画風で19世紀アカデミズムを代表した一人である。

44) Auguste Renoir (1841-1919)：フランス印象派の代表的画家。リモージュの貧しい裁縫師の家に生れ、13歳の時から陶器の絵付けをし、扉や窓の日除などにも絵を描き、家計を助けた。画家を志して上京、グレール (1805-1874) の画塾に入門、モネやシスレーを知り、フォンテーヌブローの森へ一緒に写生に行ったりする。4回の落選の後、1868年のサロンに入選したが、その作品 *Lise à l'ombrelle* にはクールベとモネの影響が強く見られる。1869年、ブージュヴァル近郊のクロワシーに移住、モネと同じく、この地の風景を軽快なタッチ、明るい色彩で描き、光の束の間の変化の効果や水面の反射を画面に定着させた。1874年、写真家ナダールの好意と援助で、第一回印象派展覧会を彼のアトリエで開催した。1881年のイタリア旅行中にラファエルの作品に感動し、以後次第に印象派から遠ざかる。後年は真珠色の肌を持つ若い女性のヌードを多数創作し注目された。リューマチの激痛に悩みながらも、最後まで画筆を捨てる事はなかった。

45) Camille Pissarro (1830-1903)：西インド諸島のサン・トマス生れ。家業を継ぐが、すぐに画家の道に入る。パリに上京 (1885)、コロアの指導を受け、クールベの写実主義にも感動する。スイスの美術学校で、モネ、ルノワール、セザンヌと友人になり、新流派の印象派の一員となった、渡英して、コンスタブル、ターナーを知り、靈感を得た。気前が良く、闊達な性格の彼は印象派の論客として活躍、ゴーギャン、シニャック、スーラ等の新進画家を援助した。静物画や肖像画も描いたが、風景画特にパリの街を描いた。パリ風景やセーヌ河畔を描いた傑作がある。

46) rue d'Amsterdam：第8区と第9区に跨り、サン・ラザール街とクリシー広場を結ぶ長さ835米、幅12米の通り。この一帯は沼沢地や荒地地だったが、1826年に土地開発業者が買収して住宅地に造成、大小24本の道路を通した。アムステルダム街はそのうちの一つで、1843年にサン・ラザール駅の移転により現在の姿になった。この街の22番地の家の4階にボードレルが住み、エドガー・アラン・ポーの作品を翻訳している。24

番地の家具付きホテルで、アルフォンス・ドーデが『サフォー』*Sapho* を執筆している。彼はそのモデルとしたマリオンことマリ・リュールと同棲しており、1905年10月28日、50歳でこのホテルで死去している。54番地の家には、1848年から51年までハインリッヒ・ハイネが住んでいた。77番地にはデュマ・ペールが1843年に住み、その後多くの画家がアトリエをこの家に持ったが、マネもその一人である。

47) boulevard des Italiens : 第2区から第9区を走り、リシュリュール街とルイ・ル・グラン街を結ぶ、長さ390米、幅35米の大通り。ルイ13世の城壁の濠を埋め立てた跡地に造成された(1685)。時代により名を変えたが、現在の名になったのは1783年からで、近くにあったthéâtre des Italiensに由来する。この劇場は現在オペラ・コミック座になっている。1728年には、通りの南側は豪邸が建造され、立派な庭園が連なっていたが、北側は野原や野菜畠だった。この大通りには、1番地にCafé Dangest, 11番地にCafé Chrétien, 後にCafé du Grand-Balcon, 13番地にCafé Anglais, 17番地にCafé Hardy, 後にレストランのMaison Dorée, 22番地にCafé Tortonni, 24番地にCafé de Paris, 27番地にCafé du Helderなどの有名なカフェが次々と開店し、パリ市民の恰好の社交場になった。

48) boulevard de Montmartre : 第2区と第9区を通り、モンマルトル街とリシュリュール街を結ぶ、長さ112米、幅35米の大通り。イタリアン大通りと同じく、ルイ13世の城壁の濠跡に開通したこの通りは、近くのモンマルトル城門からその名をとった。北側に2列、南側に3列の並木が植えられた。5番地にトリブール小劇場が1906年に建造されたが、現在では映画館になっている。6番地のCafé de Madridにはガンベッタ、ボードレル、マキシム・デュカン、ヴィリエ・ド・リラダン、ジュール・パレスなどが常連だった。9番地にはCafé des Variétés, 13番地にCafé Véron, 23番地はダンス・ホールのFrascatiが開店し、パリ市民を誘引した。

49) boulevard de Clichy : 第9区と第18区を結び、マルティール街とクリシー広場をつなぐ、長さ935米、最少幅42米の通り、田舎だった頃のモンマルトルとバティニョル村の旧道の後身である。1864年に徴税請負人の城柵の内と外を走っていた2本の道を一本に連結して出来上がった。2番地に居酒屋のLa Taverne du Bagne, 6番地にダンス・ホールのbal de l'Ermitage, 34番地にキャバレーのLe Néant, 36番地にもキャバレー cabaret des Arts, 54番地に小料理店Les Frites Révolutionnaire, 68番地には有名なCaveau du Chat-Noir, 82番地にキャバレーのMoulin-Rougeが1889年5月1日

に開店し、現在でもパリの名所の一つになっている。

50) Alexandre Gustave Eiffel (1832-1923) : フランスの技師。鉄骨構造の建築理論家として、多くの成果を残す。巨大な鉄梁を使用せず細かい鉄材を合理的に組立てた軽いトラストにより、従来は石材でしか大建造物は造成できないとした固定観念を打破、大規模な建物を建設する方法を研究し実践した。1889年にシャン・ド・マルスを会場にして開催された万国博覧会のために建立したエッフェル塔が、その代表作である。塔の建設は、1887年1月8日に本契約の調印から開始され、僅か2年余の短期間で完成し、パリ市民を驚嘆させた。落成式は、1889年3月31日であった。

この塔の建設には主としてインテリと呼ばれた人たちが反対、反対の陳情書をパリ市役所に提出しているが、その中には、アレクサンドル・デュマ・フィス、モーパッサン、ユイスマンス、フランソワ・コベなどの作家達や、音楽家のシャルル・グノー、オペラ座の設計者ジャン・ルイ・グルニエらの名があった。ただテオドール・バンヴィルはエッフェル塔を賛美する詩を詠んで、ギュスターヴを喜ばせた。

博覧会は、1889年5月6日に開幕、開会式にはサディ・カルノー大統領をはじめ内外の多数の貴賓が出席して華々しく挙行された。初日が暮れて辺りが暗くなった時、エッフェル塔が22,000箇のガス・ランプで照明され、パリの夜空に輝き、光の都にまた一つの名所を提供したのである。集まった40万人の観衆から期せずして、「エッフェル塔萬歳！」「エッフェル氏萬歳！」の喚声が湧き起こり、この塔はパリ市民公認の存在となった。期間中に200万人の見物客がエッフェル塔に昇ったので、この利益が、萬博の収益約550万フラン余の大部分を占める事になる。エッフェル塔の成功は、続いて始まるフランスの繁栄期ベル・エポック開幕の号砲になった。

51) Joris Karl Huysmans, 本名 Georges Charles Huysmans (1848-1907) : オランダ系の自然主義作家、美術評論家。勤勉な内務省官吏として一生を送るかわら創作活動にはげむ。自費出版した『マルト』*Marthe* (1876) でズラに認められ、彼の主宰する「メダンの夕べ」に参加、『背嚢を背に』*Sac au dos* (1880) を掲載した。彼は売春婦や失業者やしががないサラリーマンなどの小市民たちの平凡醜態で希望のない情景を、病的な辛辣さで描いた〔『世帯』*En ménage* (1881), 『仮泊』*En rade* (1887) など〕。しかし彼はこの窒息しそうな環境から脱出を試み、頹廢的唯美的傾向の作品〔『さかさまに』*A rebours* (1884) から、悪魔礼拝と黒ミサの世界〔『彼方』*Là-bas* (1891)〕を描き、人間不信と現実嫌悪の苛酷な苦悩から、かえってその極限の彼方に神の恩寵を体感し、熱烈

なカトリック信者になった。カトリック作家として『出発』*En route* (1895) にはじまる大作を創作する。彼はまた美術批評家として一家を成し、『近代美術』*l'Art moderne* (1883), などがある。

(追 記)

(1) 参考図書などは、〔I〕の巻末に掲載してありますので、そちらを参照してください。

(2) 前稿〔XXVII〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

- p. 6. 上から 8 行目 市民には
p. 8. 上から 10 行目 トロシユ將軍
p. 12. 上から 12 行目 利用しようとして
p. 14. 上から 14 行目 クレマンソー
p. 17. 上から 2 行目 主任技師のウ
p. 17. 上から 15 行目 *Chronique*ウ

2009. 5. 9 —